

京の大仏さん

- 方広寺大仏殿跡の調査 -

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

大仏といえば奈良東大寺のものが有名ですが、京都にも豊臣秀吉が創建した方広寺に大仏が安置されていました。

江戸時代の洛中洛外図などを見ると、大仏殿は三十三間堂の隣に堂々と描かれています。また、門前には大仏餅を売る店があり、大勢の人で賑わっていたようすがうかがわれます(図3)。

その大仏殿は寛政十年(1798)に焼失し、その後同じ様な規模の建物や大仏が再建されることはありませんでした。しかし、現在でも方広寺の巨大な石垣や、梵鐘などが残っています。

1998年の京都国立博物館内の発掘調査では、南門跡・回廊跡や石垣などを検出し、方広寺境内のようすが少しずつわかってきました(リーフレット京都No.135)。

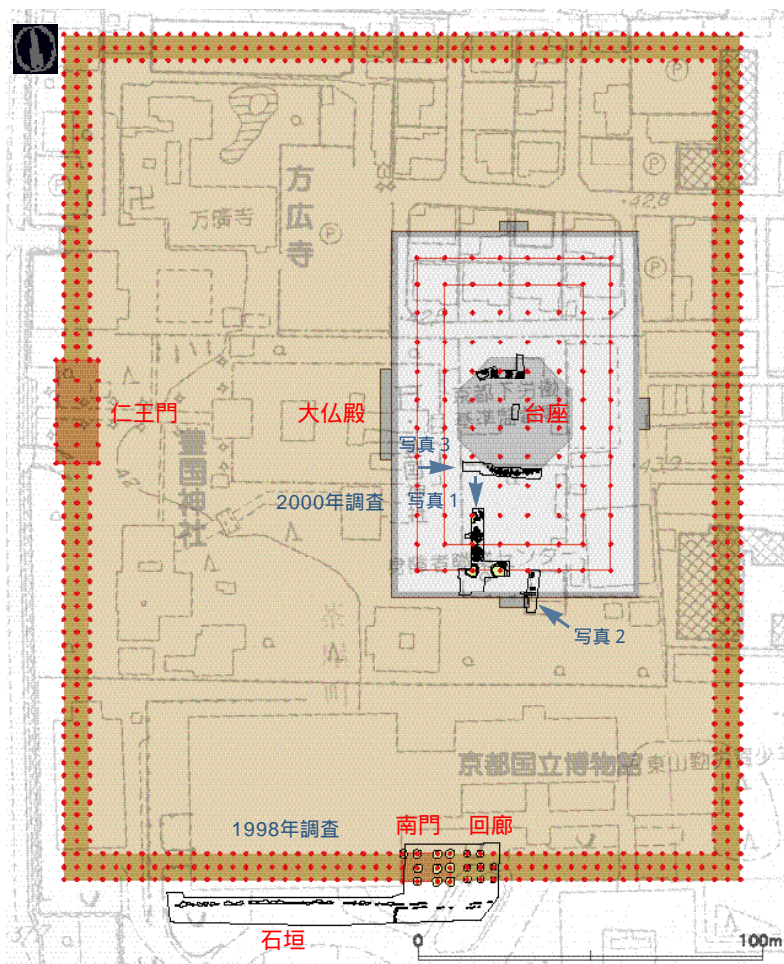


図1 方広寺伽藍復元図と調査区概略図



写真1 基壇上面の四半敷きと礎石据付跡



写真2 南面階段と基壇地覆石



写真3 大仏台座の石組み

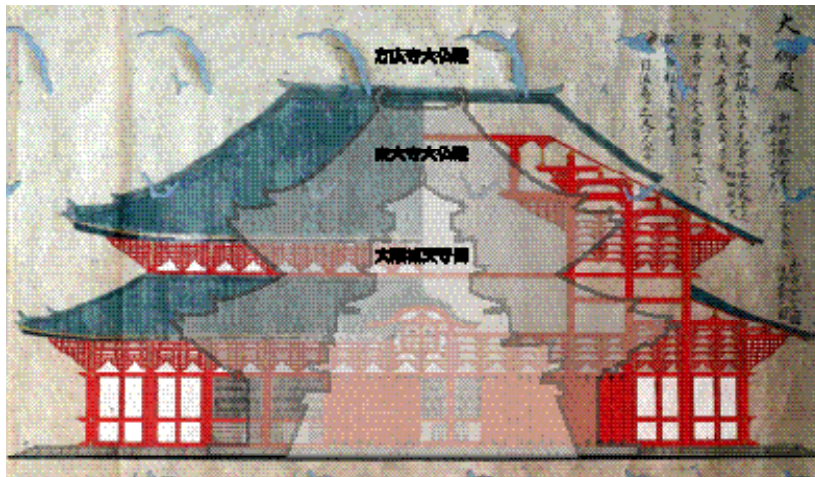


図2 方広寺大仏殿の図 大きさを比較するために加筆した
中井正知氏 所蔵



図3 名物大仏餅を売る店
『再撰 花洛名勝圖會』元治元年刊

2000年夏、豊国神社の東隣で、大仏殿跡の調査を行ないました。調査地は、現在でも周囲より一段高く、この方形の高まりが大仏殿基壇に相当すると考えられていました。

調査の結果、大仏殿の遺構を大変良好な状態で検出することができました。

まず、基壇上面の化粧石を検出しました。正方形の平らな花崗岩を基壇の方向に対して斜格子状に並べていますが、これは四半敷きといわれる方法です。石の表面が赤くなったり細かく砕けていることから、火災で火を受けたことがわかります。化粧石のない部分は、柱のあった場所です。礎石は残っていませんでしたが、大仏殿の巨大な建物を支えるために直径4mもの大きな穴を掘り、石を詰めるという基礎工事をしていました(写真1)。

基壇の南端を示す地覆石や、南中央にあった階段跡も検出しました。階段の踏み石は抜き取られていましたが、階段脇の石と地覆石はそのままの状態が残っていた

ため、基壇の高さは約1.8mであったことがわかりました(写真2)。

ところで東大寺をみると、大仏は大仏殿中央の一段高くなった台の上に座しています。調査ではこの大仏の台座も確認しました。台座は、外周に自然石を並べ、その内側に拳大の礫と土を盛って高まりをつくっています(写真3)。文献史料に、台座は径十八間(約34m)の八角形と記録されていることから、検出したのは、その南端の一辺であることがわかりました。また、台座付近で^{せん}fが多く出土したため、上面はf敷きであったと推定できます。

このような調査の結果で得た柱の間隔、基壇や階段の位置などから、基壇の位置や大仏殿の規模、92本あった柱の位置を確定することができました(図1)。文献史料や絵画史料を参考にすると、大仏殿の規模は、南北四十五間二尺七寸(約88m)・東西二十七間六尺三寸(約54m)・高さ二十五間(約49m)で、ここに高さ六丈三尺(約19m)の大仏が安置されていたのです(図2)。

秀吉は天正十四年(1586)に、奈良東大寺にならって大仏建立を欲し、方広寺の創建を開始しました。実際には金銅の大仏を見ることなく秀吉は没し、その遺志を受け継いだ息子秀頼が大仏を完成させたのは慶長十七年(1612)。実に造営開始から26年の歳月が流れていました。まもなく豊臣家は滅亡してしまいますが、京の大仏は「太閤さんのつくった大仏」として長く人々に親しまれ、大仏殿は東山の麓にその雄姿を見せていたことでしょう。

こうした大仏殿の具体的な様子が明らかになり、これまでの調査とあわせて方広寺の伽藍配置を復元することができました。

なお、大仏殿跡の遺構は地下に保存され、調査地点は緑地公園となっています。(近藤 知子)



方広寺の位置